

(承前)

4 人間生活の自立と自存にしかけられた戦争 (115～150 頁)

- 歴史家たちはコロンブスの大西洋渡航の時点の中世から近代への移行を示す日付として採用したが、われわれが商品やサービスに依存するようになる世界観の転換には五百年の歳月がかかっている。ヴァナキュラーな世界が一夜にして教育の時代となったのではなく、伝統的な ^{コスモグラフィ} 宇宙誌 ¹ は拡大する経験に照らして、徐々に調整されていった。
- もしも私 (イリイチ) がマンデヴィル ² からマルクスないしガルブレイスにいたる ^{ホモ・エコノミクス} 経済人 ^{ホモ・エドゥカンドゥス} の進展を叙述するなら、^{ホモ・エドゥカンドゥス} 教育人 というイデオロギーがネブリハからラドケ ³ を経てコメニウス ⁴ へと発展した諸段階を概観しようとする場合とは異なる時代区分を設定するだろう。
- コロンブスの新しい半球の発見が広く認識されるのには 10 年かかり、それが「新世界」という概念をつくりだすにはさらに長い年月がかかった。
- ネブリハはイザベラ女王の事業としてその臣民に話すことを教えねばならないと主張していた訳だが、その 1 世紀半後にコメニウスは、一群の教師たちがあらゆる人間にあらゆることを完全に教えるような方法を持たなければならないと主張した。
- コメニウスの主張は、「教育は子宮のなかから始まり、死ぬまで終わることがない。知るに値するものはすべて、その主題にふさわしい特別な方法で教えるに値するもので

¹ cosmography とは、全世界つまり、地球や宇宙や、死後の世界まで包括して描かれた宇宙像の事。一般に書物あるいは図版(地図や天球図)として表現される。近世以前のヨーロッパでは、重要な科学の一分野として地球や宇宙の様子を知る上で欠かせない分野であったが、やがて天文学・地球科学・地理学などの発達により、非科学的なスタンスによる描写は過去の産物となっていた。現在では当時の人々の地球や宇宙や科学に対する見方を知る「史料」として認識・活用され、天文学など科学的なスタンスではなく、宗教的な世界像を表す概念として使われている。

² バーナード・デ・マンデヴィル、Bernard de Mandeville(1670- 1733 年)は、オランダ生まれのイギリスの精神科医で思想家。主著『蜂の寓話——私悪すなわち公益』(原題 The Fables of the Bees: or, Private Vices, Public Benefits)は、多くの思想家に影響を与え、思想史、経済史などで重要な位置を占める。マンデヴィルは、イギリス文学史でも 18 世紀の代表的な散文家のなかに名前を挙げている。

³ ヴォルフガング・ラトケ、Wolfgang Ratke(1571-1635 年)か。ラトケは、ドイツの大学で神学や哲学を学び、卒業後イギリスに遊学して、ルネッサンス期のイギリスの哲学者であるフランシス・ベーコンの影響を受けて、言語中心ではなく、事物中心の教育を行うことを主張した。著作として『建白書(1612)(言語教授法の改革による言語、政治、宗教における帝国の統一、学校及び教科書印刷所の設置)』、『一般言語教授法序説(1615)(すべては自然の秩序と過程に従って教える)』があげられる。

⁴ コメニウス、Johannes Amos Comenius(1592-1670 年)は、チェコの モラヴィア東部(ワラキア地方)・ニヴニツェ Nivnice/Nivnitz)のウヘルスキー・ブロードで生まれた教育学者。本名は、ヤン・アーモス・コメンスキー(Jan Ámos Komenský)。モラヴィア兄弟団あるいは共同生活の兄弟団というプロテスタントの一派の代表の 1 人で、その教団の営む教育施設の監督を勤めた。三十年戦争およびその後の宗教戦争で故国を追われ、終生、故郷に戻ることはなかったものの、学校改革の指導者、教育改革の提言者にして、宗教的な福音の宣教師として、ヨーロッパ中の宮廷や議会から助言を求められた。そのなかには宰相リシュリュー、スウェーデン宰相オクセンシェルナ、ドイツ、ハンガリーの諸侯にイギリス議会、アムステルダム市会も含まれていた。1657 年にアムステルダム(オランダ)に移住し、そこで『教授学著作全集』を刊行し、1670 年に生涯を閉じた。

ある。この目標に望ましい世界が組織され、それがすべての人にとって学校として機能するようになっている。学ぶことが教えた結果であるときにのみ、個人はその人間性を十全に高めることができる。(中略) 学校制度は老若、貧富、身分の上下、男女の別なくあらゆる人々が、たんなる象徴や見せびらかしとしてではなく、効果的に教えられるように組織されねばならない。」(117 頁) というものである。

○コメニウスの事業は、ネブリハの企てと異なり、既に十分な需要を得ていた。イザベラ女王には触れてはならないものと考えられていたヴァナキュラーなものの領域は、既に知識人やイエズス会士、神学者たちの職探しの狩場となっており、公的教育の領域がすでに離床していた。

○ヴァナキュラーとは、「根づいていること」と「居住」を意味するインド・ゲルマン語系のことばに由来する。ラテン語としての *vernaculum* は、家で育て、家で紡いだ、自家産、自家製のものすべてにかんして使用されたのであり、交換形式によって入手したものと対立する。すなわちそれは、生活のあらゆる局面に埋め込まれている互酬性の型に由来する人間の暮らしであって、交換や上からの配分に由来する人間の暮らしとは区別されるものなのである。⁵

○ヴァロ⁶はこのようなヴァナキュラーという語による区別を言語の領域に持ち込んだが、そこでは、ヴァナキュラーな話しことばは、話者自身の土地で育まれたことばと型式〔言いまわし、表現〕^{パターン}からなるものであり、他の場所で育てられ、運び込まれてきたものとは対立するものだった。

○ヴァナキュラーという語は、ヴァロが限定づけたある一定の意味で英語〔とフランス語〕に入った。イリイチは、この語の古い息づかいをいくぶん復活させたいと考えている。イリイチが欲しているのは、交換という考えに動機づけられていない人間的活動を示す簡単で率直なことば、「固有の能力、欲望、感心にかかわる諸行為を名づける簡潔な形容詞」(120 頁) であり、彼はそれを用いて「ヴァナキュラーな言語とその再生の

⁵ ここには、不十分な記述ではあるが、『トランスクリティーク』以降の柄谷行人が展開している交換様式論の 4 つの交換様式うち、A、B、C の 3 つまでが出揃っている。柄谷が指定する 4 つの交換様式は、

A: 互酬(贈与と返礼)、B: 略取と再配分(支配と保護)、C: 商品交換(貨幣と商品)、D: X

であり、交換様式 D の X は交換様式 A の高次元での回復、或いは抑圧されたものの回帰(フロイト)として説明されている。これらの交換様式は常に既に並存してきたものだが、これらの交換様式のうち、どの様式が支配的であるかによってその時代の社会構成体の形態が決定されることになる、と柄谷は論じている。(『世界史の構造』(岩波書店、2010 年 6 月)他)つまり、ヴァナキュラーなものの領域とは、柄谷の議論に即していれば、互酬性の交換様式に相当する領域である。ただし、(残念ながらというべきか)イリイチはヴァナキュラーなものの領域を交換様式とみなしてはならず、交換と背馳するものとして捉えようとしている。

⁶ マルクス・テレンティウス・ヴァロ、Marcus Terentius Varro (B.C.116 年・B.C.27 年)は、共和政ローマ期の学者、著作家、政治家。「レアテのヴァロ」(ヴァロ・レアティヌス、Varro Reatinus)とも称される。ヴァロは大量の作品を残していて、フリードリヒ・ウィルヘルム・リツェル(Friedrich Wilhelm Ritschl)によれば、74 の作品、約 620 巻を記したと推測されているが、そのうち完全な形で残っているのは『農業論』1 つしかない。アウルス・ゲッリウスとセリウスの『アッティカの夜』などの中に多くの断片が残っている。クインティリアヌスに「ローマ人で最も教養がある」と言わしめたヴァロは、キケロ、大プリニウス、ヴェルギリウス、コルメッラ、アウルス・ゲッリウス、アウグスティヌス、ウイトルウィウスといった多くの古代の著作家たちによって、貴重な情報源と見なされてきた。

可能性を語ることによって、望ましい未来社会の生活のあらゆる場でもう一度ひろがるかもしれない ^{あること}存在、^{すること}行動、^{つくること}制作 のヴァナキュラーな様式がありうることに気づかせ、その議論をひきおこそうとつとめている」(121 頁)。

○イリイチによれば、「母語」^{マザー・タング}という語は、未だかつてヴァナキュラーなものを意味したことはなく、語源的には、カトリックの修道士が説教するとき、ラテン語のかわりに用いた特定の言語の名称として使用されたことに由来している。

○ニーズ、すなわち、「人が生まれながらに定めもっている人間性なるものに達するために、専門家からの制度的サービスを必要とする」(122 頁) という考え方は、カロリング朝まで遡ることができる。

○八世紀に行われた教会改革⁷の後、教会長老は、教師、ソーシャルワーカー、教育者といった人たちの先駆者へと姿を変え、教区民の個人的なニーズを配慮して秘蹟や牧師の神学を身につけ、そのようにして成立した牧会神学が聖職者たちの定期的なサービスに対するニーズを定め、個人、家族、村落共同体にかんする世話を制度的に定める傾向が、前例がないほど顕著になった。

○「聖なる母教会」という語は、(キリスト教) 信者の現実の集まりをほとんどまったく意味しないものとなり、母という語は、それ以後、救済に絶対必要なサービスが、そこからしか得られない、神秘的で目に見えない実在にだけ関係するようになる。人々がその母なる恩寵に近づく機会、男性聖職者の階級組織の完全な統制下に置かれ、それに依存していくことで、生命の制度的源泉に近づくことを取り次ぐ男性階層組織という性に特有の前例なき神話が成立する。

○九世紀から十一世紀にかけて、専門家のサービスによって満たすことのできるような全人類に共通のニーズが存在するという考えが、形を整えてきた。

○ルイス・マンフォード⁸は、産業制度を基礎づけている基本的前提は九世紀の修道院改革によってつくられたと主張している。マンフォードは直観的にそう読み取ったようだが、その大部分がカロリング・ルネッサンスに淵源していることには気づいていない。

○母なる教会という制度の名のもとに、専門家によって提供される個人的サービスなしに救済はありえないという考えは、カロリング・ルネッサンス以前には認められない考え方であり、この発展ぬきに、われわれ自身の時代を考えることはできない。

⁷ ピピン 3 世(小ピピン)の後、カロリング朝を継いだシャルルマーニュ大帝(フランク王 768 年・814 年、西ローマ皇帝 800 年・814 年)は、西ヨーロッパの大部分を支配し、一大帝国を築き上げた。800 年にローマ教皇から戴冠を受け、ここに形式的に西ローマ帝国が復興したとされる。シャルルマーニュはキリスト教に基づく統治を進めるには、聖職者の資質を高めることが必要と考え、各地からアーヘンの宮廷に人材を集めるとともに、教育を振興した。特に古典研究を進め、俗語化していたラテン語が純化され、ラテン語教育が盛んになった。また、各地に教会付属の学校が開かれた。こうした文化の隆盛を「カロリング・ルネッサンス」と呼ぶことがある。イングランドから招かれた神学者のアルクインがカロリング・ルネッサンスの中心人物として有名である。

⁸ ルイス・マンフォード、Lewis Mumford (1895 -1990 年)は、アメリカ合衆国の建築評論家、文明批評家。歴史家。ジャーナリスト。『ユートピアの系譜』(1922 年)、『スティックス・アンド・ストーンズ』(1924 年)、『黄金の日』(1926 年)、『褐色の三十年』(1931 年)、『変貌する人間』(1956 年)、『歴史の都市、明日の都市』(1961 年)等多数の著書がある。

- 中世神学は、およそ五百年の時を経てトレント公会議（1545 年）⁹において、「聖職者の階層組織によってミルクを与えられる母なる教会という自画像」（124 頁）という公式規定を行うにいたる。そして、教会は世俗的なサービス組織のモデルとしての役割を果たしていた。
- 聖職者のサービスが人間の本性のニーズとなり、それが必然的なものとされ、それなしですまそうとすれば必ず永遠の生命が危険にさらされという通念が成立したことが重要なのであり、現代のサービス国家や福祉国家を考える際は、この非世襲的なエリート有能力に基礎を置いて考える必要がある。
- メロヴィング朝¹⁰から中世最盛期の間（つまりカロリング朝の期間）に生じたこのような趨勢を経て、はじめてヨーロッパは、ひとつの観念、ひとつの政治的実体として形をとりはじめたが、その時点ではまだ民衆の話しことばは問題となるようなものではなかった。
- 民衆の話しことばは、「ロマンス語¹¹」ないし「テオディスク語¹²」と呼ばれ、そのいくらか後にやっと「俗語」という表現がラテン語と異なる民衆のことばの名称〔共通了解事項〕として定着した。
- ローマ時代以来、個人の最初の言語は *patrius sermo*（家族を率いる男性の長）の言語であり、古代ギリシャや中世ヨーロッパにおいては、相互に理解可能な方言と様々な言語は現在のように区別されていなかった。われわれが単一言語社会として知っているのは例外的な存在であり、バルカン半島からインドシナ西武の辺境にいたるまで 2〜3 種以上のことばで話していないような村を見つけるのは、今でも稀なことである。
- ヴァナキュラーなことばは、専門化され、学習された言語（教会のラテン語や宮廷の古フランコニア語〔フランク語〕¹³と対立するものであり、十一世紀にいたるまで地方のワインや食物の風味と同じように、また家屋や鋏の形態と同じくらいに、その多様性は明白だった。

⁹ 教皇パウルス 3 世によって 1545 年 3 月 15 日にトリエント（現在のイタリア領トレント）で召集され、1563 年 12 月 4 日にピウス 4 世のもとで第 25 総会を最後に終了したカトリック教会の公会議。諸事情により、多くの会期が断続的に行われたが、宗教改革に対するカトリック教会の姿勢を明確にし、対抗改革といわれるカトリック教会の刷新と自己改革の原動力となった。

¹⁰ A.D.481-751 年ゲルマン人（西ゲルマン）であるフランク族の支族のサリ族が築いたフランク王国における最初の王朝。メロヴィングの名は、始祖クロヴィスの祖父メロヴィクスにちなむ。4 子に分割相続して以後、分裂・内紛を繰り返して衰退した。

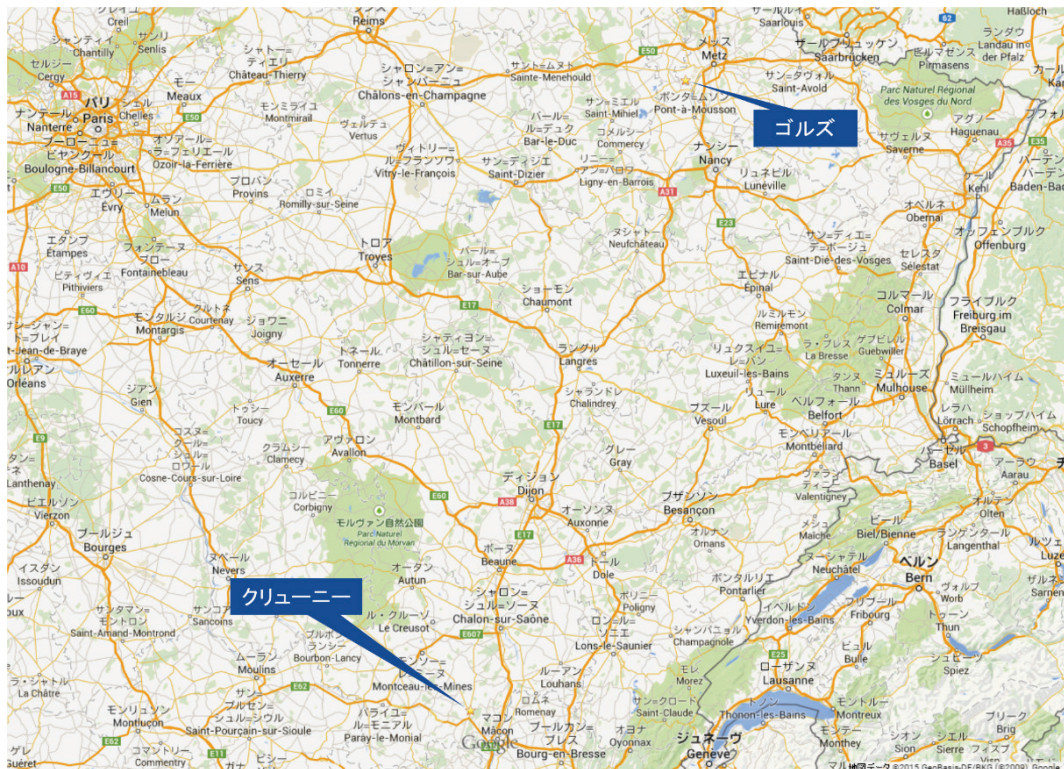
¹¹ 様々なロマンス諸語があり、インド・ヨーロッパ語族イタリック語派ラテン・ファリス語群に属する言語のうち、ラテン語の口語である俗ラテン語に起源をもつ言語の総称としてこう呼ばれている。また、ラテン・ファリス語群のことをロマンス語群、イタリック語派のことをロマンス語派と言うこともある。

¹² 「ドイツ語」という名称は 786 年 *theodiscus*（テオディスクス）というラテン語型で初めて文献に登場するようだが、これは「民衆の」という意味を表す古高ドイツ語の形容詞 *diutisc* から派生しているとされる。このテオディスクスはチュートン人（*Teutone*=トイトーネ、ドイツ語辞書によると、ゲルマン系で古高ドイツ人の先祖とされる）のラテン語型ともされているようである。

¹³ 古代フランク人の言語。西ゲルマン語に属し、現在のオランダとその周辺に当たる地域でメロヴィング朝時代（7 世紀以前）に使われた。フランク人はもと現在のオランダ・フランドルに住んでいたが、南に進出してフランク王国を建てた。のちに古フランク語は北部では古低フランク語（古オランダ語）となり、南部（しかしフランスの北半分）では古フランス語に取って代わられた。

○そこに「母語」¹⁴が突然出現することによって、「ヴァナキュラーな話しことばは道徳的に重要な一問題へと転化する」（126 頁）。

○イリイチは、その変化がゴルツ修道院¹⁵を中心に始まったとみている。ゴルツはロレーヌの母修道院で神聖ローマ帝国のドイツ地域における修道院改革の中心となった。その改革運動は、シトー修道会の生活を強化したもので、クリューニー修道院¹⁶の改革事業に匹敵するものであり、そこから一世紀のあいだに 160 もの修道院が中央ヨーロッパ北東部に設置されていった。



ゴルズ修道院とクリューニー修道院の位置関係

○ゴルツ修道院は、古フランコニア語系とロマンズ語系のヴァナキュラーな言語が分かれる境界地帯（ロレーヌ地方）に位置しており、クリューニー修道院出身の修道士との境界争いが生じていた。そこでゴルツの修道士たちは、ヴァナキュラーなことばを問題として取り上げ、古フランコニア語で説教を始め、その語の価値を語り、説教壇を公開討論の場として使い始めた。ゴルツの修道士たちは、古フランコニア語は、男たちがロ

¹⁴ 一般には母語は、人間が幼少期から自然に習得する言語という意味合いが強いが、イリイチは、母語はヴァナキュラーな言語と異なるより人工的（教えられる）言語という対比のもとにこの用語を使用している。

¹⁵ Gorze 修道院は、フランスのメスの西南西 15km ほどのところにあった修道院。749 年に設立。

¹⁶ クリューニー修道院 (Abbaye de Saint-Pierre et Saint-Paul de Cluny: 仏語) は、当時のブルグント王国内で現在のフランス・ブルゴーニュ地方のソーヌ＝エ＝ロワール県・クリューニーに 909 年 (910 年とする説もある)、アキテーヌ公ギヨーム 1 世により創建され、フランス革命まで存続したベネディクト会修道院。ロマネコンティ等のブルゴーニュ地方の葡萄畑は、この修道院の修道士たちによって拓かれた。

マンス語系のヴァナキュラーな言語を使い始めた地域の女性たちに話されていたことと、母なる教会が使う言語であることを武器として主張した。

- この二つの主張の裏には、十二世紀において母性が帯びていた神聖性を理解しておく必要がある。そして、母語という用語はそのような中で、最初から制度的な主張に役立つように日常の言語を道具化したものとして登場したのである。母語は、「ルターがヘブライ語の聖書を翻訳するためにつくった言語を意味するようになり、学校教師がその本を読むために教える言語を意味するようになり、それからまた国民国家の存在を正当化する言語を意味するようになった」(129 頁)。
- 今日、「母語」は、子どもが学ぶ最初の言語という意味と、国家の当局者が人間の〔市民の〕最初の言語であるべきだと決定した言語という二つの意味を持っている。
- このようにして母語は教えられる言語として定着し、それへの依存を人々の修正として埋め込む。そのイデオロギーを定式化したのはネブリハである。
- 言語を教えることがひとつの就職口となるにつれ、それにはたくさんの金がかかるようになる。「いまや言葉 (words) は、国民総生産 (GNP) を構成する市場的価値の最大二部門のひとつである」(130 頁)。
- 「言語の会計学は、住民のあいだで標準化され、教えられた言語が相対的に優位であるという資料を提供してくれるであろう」(132 頁)。
- 貧乏な人々に向けられた話し言葉より、金持に向けられた話し言葉の方が、より多くのコストがかかっているのは見やすい理だ。金持ちは個人教授を受けることができるし、沈黙を購うことによって自分自身の優越した独自の世界に閉じこもることもできる。
- 一方、教育者や政治家、エンターテイナー等の働きによって、貧乏な人たちはたちどころに沈黙という (ヴァナキュラーな言語の母胎となる) 不可欠なぜいたくに対する権利を失ってしまう。
- 「どんな国でもその国のモーター用動力に費やされる金は、給料取りの話し手たちの口から発せられることばの売春に現在支出されている金と比べると、顔色のないほど小さいだろうということである。富裕な国々では、言語は、巨大な投資を吸収して、信じがたいほどスポンジ状になっている」(133 頁)。
- こうしてイリイチは、ここに次のような問を立てる。すなわち、言語に巨大な投資を受け入れてしまった集団の日々の話しことばと、市場の外にその言語が存続している人々の話しことばの差異がどこにあるのか? 「言語そのものの構造と機能は投資率によって変化するだろうか。これは、資金を吸収するすべての言語が同じ方向に変化するような変動だろうか。」(134 頁) と。
- 教えられた日常の言語は、産業化以前の文化には先例のないものであり、日常の話しことばを学ぶためにそのお手本や教師に金を払うことは、地下 (化石) 燃料への依存と同様の産業化した経済に独自の性格を示している。このように言語とエネルギーが同様に全世界的なニーズとして扱われ、計画課された生産と分配によって人々を満足させ

るものとなったのは、近年になってからのことだが、このように資本化された言語は、ヴァナキュラーな言語とは異なって生産に由来するものということもできる。

- ヴァナキュラーなものは、相互的な互酬のさまざまな形態によって広まったのであり、「たいていの文化では、話しことばは日常生活に埋め込まれている会話から、すなわち、喧嘩と子守歌、うわさ話、物語、夢に耳を傾けることから生じたことが知られている。」(136 頁)

- 話したり聞いたりすることを教えられた人々にとって、教師から教わることのないヴァナキュラーなことばは、数多くの手本のなかで、開発度が低いもう一つの手本のように見えるかもしれないが、合理的教育を免れている言語は、意図的に教えられた言語とは種類の異なる社会現象とみななければならない。

- この差異（言語に巨大な投資を受け入れてしまった集団の日々の話しことばと、市場の外にその言語が存続している人々の話しことばの差異）が示しているのは、「言語そのものあるいは言語の獲得に対する力という意識」(137 頁)であり、後者において「それぞれの言語は、その言語の枠組みに適合した、一連の特有な経験を記憶しているひとつの様式」となっている。

- ネブリハの出現に至るまで、教師につくことなしにおぼえる言語は、歴史を通じて優位を占めており、日常の言語はおもにヴァナキュラーなものだった。

- もちろん、僧侶に教えられたラテン語やサンスクリット語、宮廷語としての古フランコニア語やペルシア語等の例外は常に存在したが、それは必ずしも言語を教えることを意味するものではなかった。

- 最近に至るまで、日常言語は計画の産物ではなく、金銭の支払い対象や配達されるものでもなかった。「国民国家の起源を論じるすべての歴史家は国語の強制に注意をはらっている。ところが経済学者は、この教えられる母語が特殊近代的な商品の最初のもの、すなわちその後のあらゆる「基本的必要」の原型であるという事実を一般に看過している。」(140 頁)

- このようにイリイチは、「教えられた母語とヴァナキュラーなもの」との間にひとつの境界線を引いてみせるが、それはあらゆる地理的、社会的分割、性差や階層による分割とは異なるものである。

- 留意しなければならないのは、エリート言語、交易語、第二言語、地方語は、どれも新しいものではないが、「教えられたヴァナキュラー語」という贋物が商品となってしまうことは全く新たな事態だということである。

- ヴァナキュラーなことばと教えられる母語は、口語〔通常のはなしことば〕というスペクトルの両極端に位置しているのだが、現在の口語〔通常の話しことば〕は、このスペクトル上を、ヴァナキュラーな「通信・伝達」から資本集約的な「通信・伝達」へと移動している。イリイチは、ここにヴァナキュラーなものの衰退をみている。

- そして「産業社会の生活で形成された人間には、ここで論じているような相違、すなわ

ち資本化された言語と、経済的に費用の測定できないヴァナキュラーな言語との相違がわからなくなる。これと同じ種類の禁制によって、産業化された制度のなかで育てられている人々は、たとえば母乳による養育と哺乳ビンによる哺育、文学作品と教科書、自分自身で移動する一マイルと乗客としての一マイル、といったことの根本的区別を感じることが困難になっている。これは私が過去何年にもわたって、その問題点を論じた領域である。」(146 頁)

- イリイチがこのような議論を展開すると、プロレタリアートの教師を自任する人たちは、イリイチが非経済的なすばらしさをもったものに重要性を与えて批判的な論点を避けていると非難し、基本的ニーズにかかわる商品の公正な配分を探索すべきことを主張する。
- しかし、今のところヴァナキュラーな価値を普遍的な商品で置き換えようとするすべての試みは、平等とは反対に貧困の階層化として現代化されている。そして現代化された貧困者層は既にヴァナキュラーな諸活動が大幅に制限された世界で、なおヴァナキュラーな活動に従事することができるとしても、そこから最小の満足しか引き出せない状況となっている。
- イリイチがいまひとつ指摘しているのは、母語が、金を支払われる専門教師からではなく、金を支払われることのない両親たちによって教えられるようになってきていることであり、それをサウス・ブロンクスの、同僚と結婚している若い大学教師の例を引き合いに出して語っている。
- 「私はこの男を、この地獄のなかに住むことを選んだということで畏敬の念をもって眺めていたのだが、しかし、実は彼は親であることをやめ、まったくの教師になっていたのである。自分自身の子供を前にして、この夫婦は教師という立場に立っていた。彼らの子供たちは両親なしで成長しなければならなかったのだ。というのも、この二人の大人は、二人の息子と一人の娘にひとこと話しかけるたびに、子供たちを「教育」しようとしていたからである。(中略) 専門家的に愛する者として子供を育てている専門家的な親にとって、また近隣の組織のために半ば専門家的なカウンセラー技術を自主的に提供しているそうした親にとって、管理された社会にたいする自分の無償の貢献と、それと対照的な、ヴァナキュラーな世界の回復となりうるものとを区別することは、依然として無意味なものにとどまっている。こういうひとは、拡大する影の経済を計画し組織するという、新しいタイプの成長指向のイデオロギーにとってのかっこうの餌食である。それは経済人が直面する、倨傲にみちた最後のフロンティアである。」(149～150 頁)

5 生き生きとした共生を求めて－民衆による探求行為－（151～190 頁）

- イリイチは、ボレマンズによる読書案内に記されている「民衆によるサイエンス」(science by people) と「民衆のためのサイエンス」(science for people) の区別に言及する。
- 「民衆のためのサイエンス」とは、一般に研究・開発 (Research & Development: R&D) と呼ばれているもので、政府・企業・大学・病院・軍隊・財団などの組織によって実施され、自分たちの調査研究の成果を売り込みたいと考える人々がチームをつくって事業として行う活動でもある。
- R&D は人類共通の福利のためになされる——とその後援者や研究担当者は主張するが——と同時に多くの費用がかかる。それゆえ、それは高学歴の学者等にとって定収入かつ高収入を約束されたよい仕事となる。R&D は、「中性子爆弾、筋ジストロフィー症、太陽電池、養魚池など、何でもつくりだしてしまうが、要するにそれは、つねに他の人々用のサービスのつくりだすのだ。」(153 頁)
- これに対して「民衆によるサイエンス」は、「権力分散的な多面的な方向性をもった一種の共同体のなかで、現代的なさまざまな手続きを踏んで自分たちを消費から切り離し、簡素で、^{アンブラグ}ごたごたと入り組んでいない、自立的な生活」(151 頁) を送る人々が自分たちの探求活動を指し示すのに使われている。
- この探求行為には、資金もスポンサーもなく、商業的な成果はなんら期待されていないが、この探求の従事者たちは、「注意深く、入念に、練磨された手段で」(153 頁) 探求活動を行い、「このわずか十年のあいだに、自分たちの成果を普及し批判しあえる公開討論の場となる、オルタナティブな研究ネットワークをつくりあげてきた。」(153 頁)
- ボレマンズは、「民衆によるサイエンスは……人々が市場や専門化への依存を増すことなく、日々の諸活動の利用上の価値を高めるためになされる探求行為である」(154 頁) と定義づけている。
- イリイチは、このような「民衆による^{リサーチ}探求行為」は、二十世紀の言語では何とも名づけがたいものについての探索といった意味合いを帯びており、それは図書館での文献調査によって支えられ、世界中の仲間によって批判的に評価されるとともに、探求行為の遂行者が自己自身を市場から切り離そうとする努力することをも意味しているとみている。それは新しい総合における自律性の探索であり、「旧き良き日々」への回帰ではないし、宗教的事業でもなく、ユートピア的と呼ぶことはできないとしている。
- イリイチは、この民衆による探求行為の意味を歴史的にも明らかにしようとして捜し歩き、十二世紀の思想家ユーグ・ド・サン・ヴィクトール¹⁷ (以後「ユーグ」と表記)

¹⁷ サン・ヴィクトールのフゴー、HUGO DE SANCTO VICTORE (1096-1141 年) は、いわゆる「サン・ヴィクトール学派」の創始者。1115 年にパリのサン・ヴィクトール修道院に入り、後にその修道院長を務める。思想的には、ディオニュシウス・アレオパギタの神秘主義の影響を受けているとされ、その一方で理性をも重んじ、哲学(倫理学、自然学)を受け入れ、アベラールの立場を支持している。

に辿り着く。

- イリイチは、ユークがテクノロジーの哲学の系譜の中で重要な位置を占めているという。しかし、彼の思想が科学とテクノロジーの歴史の中で論じられたことはいまだかつてない。そこで、イリイチは、彼の思想を論じる前に、彼の姿を蘇らせる必要があるとして、伝記的素描を試みている。
- ユークは、1096 年、おそらくはイーブルというフランドルの町に生まれ、ザクセンで育った。
- 青年時代、彼は「聖堂参事会¹⁸」と呼ばれた新しい宗教団に加わる。それは通常の修道院ではなく、十二世紀の自由都市の興隆がもたらした男性のみの共同体だが、通常の修道院が田園共同体での生活を基盤として、周囲から隔絶したものであったのに対して、聖堂参事会は都市部に居を構えて、一般信者の徳化に努めるという性質を持っていた。
- 1115 年、若きユークは、叔父と共にザクセンからパリへと旅をし、パリにある聖ヴィクトールの聖アウグスティヌス会修道院に住み着き、そこでピエール・アベラール¹⁹が校長を勤めたていたノートルダム大聖堂の付属学校で教えることになる。
- ただし、ユークがパリに到着して間もなく（1117～8 年頃）、アベラールは、エロイズとの恋愛事件が発覚し、校長の座を追われ、去勢され、名誉を剥奪されている。
- アベラルールの教え方は、方法的な懐疑の大切さを説いた点に特徴があり、「倫理学において、彼は類推原理を用いて、しきたりと律法主義のはびこる時代に良心と意図とを強調した。」（160～161 頁）アベラールには、クレルヴォーのベルナル²⁰やユークの師でもあるギョーム・ド・シャンポー²¹等の論敵がいたが、アベラルールの失脚のため、ユークの名が知られるようになる頃には、表面的には彼らが勝利を手にした状態にあった。
- ユークの名が歴史に登場する最初の記録文書は、まさにそのタイミングで現れており、彼の名が現れた時には既に、彼は聖ヴィクトールの師として認められている。

¹⁸ 聖堂参事会 *Capitulum* [ラテン語] とは、ローマ・カトリック教会の機関 (*chapter* [英]、*Kapitel* [独]、*chapitre* [仏])。個々の聖堂に属する聖職者 *canonici* によって構成される合議体的組織。中世中期以降はほぼ定員制をとる。この名称は順守すべき会則の章 (*capitulum*) を日々読みあげたことに由来し、転じて集會場所、構成員の全体を指すようになったといわれる。組織としては、教会の聖務執行および世俗的諸任務の遂行にあたり、司教ないし教院長 *praepositus* を補佐すべき義務を負うほか、評議・同意権をもって司教等の行政権力を統御していた。

¹⁹ ピエール・アベラール、*Pierre Abélard* (1079-1142 年) は中世フランスの論理学者・キリスト教神学者。「唯名論」学派の創始者として知られ、後にトマス・アキナスらによって集成されるスコラ学の基礎を築いたとされる。弟子のエロイズとのロマンスでも有名。

²⁰ クレルヴォーのベルナル、*Bernard de Clairvaux* (1090-1153 年) は、12 世紀のフランス出身の神学者。すぐれた説教家としても有名。聖公会とカトリック教会の聖人であり、33 人の教会博士のうちの一人でもある。教皇ピウス 12 世からは「甘蜜博士 (*Doctor Mellifluus*)」の称号を贈られている。また第 2 回十字軍の勧誘に大きな役割を果たしたことで知られる。

²¹ ギョーム・ド・シャンポー、*Guillaume de Champeaux* (1070 頃 - 1121 年) 初期スコラの神学者。ランのアンセルムスとロスケリヌスに学び、1095 年以後ノートルダム聖堂付属学校で教えた。彼は中世の普遍論争で 12 世紀初期の極端な実念論を代表したため、弟子のアベラールによって徹底的に攻撃された。最初は同じ種に属する個物はみな実体的に同一であるとの説をとっていたが、それはつきつめれば汎神論になるのではないかと批判を受けて、同一とは本質のことではなく差別がないという意味だとこたえ、いわゆる無差別説を主張した。